

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 西坂 祥平

論文題目 中国語母語話者による第二言語としての日本語の
テンス・アスペクト習得

論文審査担当者

主 査 名古屋大学教授 杉村泰
委 員 名古屋大学教授 玉岡賀津雄
委 員 名古屋大学准教授 鷺見幸美

[本論文の概要]

本論文は、序論の章と結論の章を含め、全部で7章からなる。

本研究は中国語を母語とする日本語学習者による日本語のテンス・アスペクト形式の習得過程を明らかにし、習得上の問題点やその要因を探ったもので、特に日本語のアスペクト形式「ている」を中心に、「る」「た」「ていた」「ある／いる」との使い分けについて論じている。これらの表現は日本語学習者にとって習得しにくい項目であり、例えば(1)と(2)の下線部や、(3)～(5)の下線部の選択で迷うことがある。

(コップを手に取り、表面にできているヒビに気づいて)

- (1) あれ、コップが割れている。
- (2) ?あれ、コップが割れた。

(道を歩いていて、前方に何かを見つけて)

- (3) あ、財布が落ちているよ。
- (4) ?あ、財布が落ちたよ。
- (5) ?あ、財布があるよ。

これについて先行研究では、困難さの原因は中国語の影響にあるとされている。しかし、母語の影響と結論付けるには十分検証がなされているわけではない。これに対し本研究では日本語と中国語の対照研究の成果に基づき、中国語母語話者の日本語のテンス・アスペクト習得において中国語の影響がどの程度見られるのか分析を行っている。

「第1章 序論」では、本研究の目的について中国語を母語とする日本語学習者による日本語のテンス・アスペクト形式の習得過程を明らかにし、習得上の問題点やその要因を探ることにあると述べている。この問題に取り組む理由として、まず、本研究で対象とするテンス・アスペクト形式の使い分けがコミュニケーション上重要であることを述べている。そのうえで、日本語と中国語の言語間の差異に注目して、中国語を母語とする日本語学習者のテンス・アスペクト形式の習得状況を明らかにすることで、教育現場への還元が期待できることを主張している。すなわち、先行研究で必ずしも十分に検討されてきたとは言えない、学習者の母語である中国語の影響について、議論の余地が残されていることを主張している。

「第2章 先行研究」では、まず日本語のテンス・アスペクト形式に関する母語の影響について概観し、次に日本語と中国語におけるテンス・アスペクト形式の基本的な性質を述べ、最後に、日本語のテンス・アスペクトの習得に関する先行研究の問題点を指摘し、次のように本論文の研究課題を提示している。

(研究課題 1)

中国語を母語とする日本語学習者は、「る」「た」「ている」「ていた」の使い分けができるか。
できない場合、使い分けの難易度の差に、母語はどのように影響しているか。

(研究課題 2)

中国語を母語とする日本語学習者は、「ている」「た」「ある／いる」の使い分けができるか。

できない場合、使い分けの難易度の差に、母語はどのように影響しているか。

続く第3章から第6章では、本研究の調査結果について論じている。

「第3章 「る」「た」「ている」「ていた」の使い分け—調査紙の作成と妥当性の検討—」では、まず Reichenbach (1947) の SRE 理論について説明している。これはテンス・アスペクトの意味を S (発話時、Speech time)、R (参照時、Reference time)、E (出来事時、Event time) の3点によって記述するもので、個別言語の枠を超えて使用される概念である。本研究ではこの SRE 理論を用いて、先行研究の崔 (2009) では学習者の母語である中国語の影響が十分に考慮されていないという問題点があることを指摘している。そのうえで、中国語のアスペクトマーカ―の特性を考慮してタイプ分けした動詞を用いて調査紙を作成した。それを使って中国語を母語とする日本語学習者 30 名と日本語母語話者 30 名を対象として予備調査を行った結果、ル形を選択すべきところでル形を選択できてはいるものの、テイル形の用法にかかわらず未来のことを述べる際には、テイル形の代わりにル形を使用するという傾向があることを指摘している。さらに用法別、時点別に見てみると、「動作の持続」「結果の状態」の両用法において「未来→過去→現在」の順に正答率が上がるという結果が得られたことを指摘している。日本語においては、未来の文脈において用いる形式と、現在の文脈において用いる形式がともに「ている」である。しかし、学習者にとっては、「ている」が未来の文脈においても用いられると言うことを認識しづらいようである。そのため、「未来」の文脈における「ている」選択の難しさは、テイル形が「現在」および「未来」を表すのに対して、テイタ形は「過去」のみを表し、学習者がインプットに触れても、それが「未来」を表していることに気づきにくいことに起因する可能性があることを指摘している。

「第4章 「る」「た」「ている」「ていた」の使い分け—習熟度の異なる学習者の習得状況—」では、中国の大学で日本語を学ぶ学習者 180 名と日本語母語話者 54 名を対象に行った調査結果を報告している。SPOT テストの結果をもとに、学習者を習熟度の異なる 3 グループ (各 60 名) に分け、その習得状況を述べている。調査の結果として以下の点がまとめられている。まず、「る」「た」の習得については、学習者の選択に誤りが見られることがわかった。しかし、習熟度の上昇に伴い、義務的文脈における正答率は上がっていく。しかし、「現在」「過去」「未来」にかかわらず「結果の状態」における「た」、「未来」の「ている」文脈における「る」の選択傾向は上位群においても強いことが明らかになっている。次に、「現在」「過去」「未来」の時点における「動作の持続」と「結果の状態」の習得状況については、いずれの時点においても「動作の持続」のほうが「結果の状態」より正答率が高く、先行研究で指摘されている習得難易度の差を支持する結果が述べられている。最後に、「結果の状態」の習得において、日本語の動詞に対応する中国語の動詞のタイプ (“了” と “着” との共起可否) による難易度の差が見られるかが検討されている。分析の結果、いずれの習熟度においても、対応する中国語の動詞のタイプによって、「結果の状態」の難易度が変わることが報告されている。タイプ 1 (“了” とのみ共起可能) では、「現在」「過去」「未来」にかかわらず正答率は低く、「た」の選択が多いことが明らかになっている。一方、タイプ 2 (“了” “着” いずれとも共起可能) では、下位群から正答率は高く、「た」の選択率も低いという結果が得られている。こ

のことは、「結果の状態」における母語の影響の存在を示すものである。

「第5章 「ている」「た」「ある／いる」の使い分け—調査紙作成と日本語・中国語の母語話者データの収集—」では、「結果の状態」の「ている」と「存在」を表す「ある／いる」が類義関係にあると主張した陳（2009）などの問題点を指摘したうえで、同一場面における日本語の中国語におけるアスペクト表現が比較可能な空欄補充タスクを作成している。このタスクを用いて、日本語母語話者 58 名と中国語母語話者 136 名から母語データを収集し、同一場面における日本語と中国語の事態の述べ方を対照した。その結果、日本語話者が「移動動詞+ている」を用いる場面で、中国語話者は“有”だけでなく“了”も用いること、日本語話者が「状態変化動詞+ている」を用い、中国語で“着”が使用可能な場面で、中国語話者は“着”だけでなく“有”も用いることを明らかにした。この結果は、日本語が「ている」を用いて状態／位置「変化」と結果としての「状態」／「存在」を同時に言語化するのに対して、中国語は（“着”が可能な場合を除いて）「変化」と「状態」／「存在」のどちらか一方のみを表すとする稲垣（2013）の分析を支持するものである。日中両言語でパラレルなデータを収集し、陳（2009）では明らかでなかった中国語における「ている」場面の表し方の実態を明らかにしている。さらに、庵（2010）が移動動詞と状態変化動詞のテイル形の違いに関して提案した「存在型」と「非存在型」の区別が、状態変化動詞のテイル形の分類にも有効であり、それが中国語の状態変化動詞における“有”と“着”の使い分けに反映されていることを示している。

「第6章 「ている」「た」「ある／いる」の使い分け—母語話者データと学習者データの比較—」では、日本語学習者の「ている」「た」「ある／いる」の習得状況の実態を明らかにし、母語の影響の観点から検討するため、第5章と同様のタスクによる調査を上級日本語学習者 31 名に対して行っている。中国語母語話者は、上級レベルであっても日本語母語話者が「移動動詞+ている」を用いる場面において、「移動動詞+ている」を用いることは困難であることを明らかにした。この場面においては、「ある／いる」あるいは「た」の使用傾向が見られ、先行研究の議論を踏まえて行った第5章の結果を裏付けるものである。その一方、日本語母語話者が「状態変化動詞+テイル」を用いる場面については、「存在型／非存在型」にかかわらず、中国語母語話者の高い「ている」使用の傾向が見られた。さらに、「存在型」の場面においては、第5章で得られた、「ている」の代わりに「ある／いる」を使用するという仮説を支持する結果であり、母語からの影響で説明可能であることを示している。

「第7章 結論」では、本研究から得られた結論をまとめ、本研究の意義と今後の展望を述べている。

以上、本論文では、日本語のテンス・アスペクト習得研究における「る」「た」「ている」「ていた」および「ている」と「ある／いる」「た」との使い分けについて、母語の影響という観点から考察し、どのような動詞タイプがどのように使い分けに影響しているのかを明らかにしている。使い分けの困難さについては特に「結果の状態」を表す際に顕著であることが指摘されている。具体的には、

研究課題 1 の「る」「た」「ている」「ていた」の使い分けの難易度の差において、“了” とのみ共起可能な動詞に対応する動詞の場合、「た」を選択する傾向が強く、それは「現在」「過去」「未来」を問わず見られている。“了” “着” いずれとも共起可能な動詞に対応するものの場合、その傾向は見られず、高い正答率が報告されている。“了” “着” との共起可否という点から行った動詞のタイプ分けが「結果の状態」の習得難易度の差の説明および誤答の予測を可能にすることを示している。

また、研究課題 2 の「ている」「た」「ある／いる」の使い分けの難易度の差において、中国語で“了” と“有”の使用が見られた「移動動詞+ている」(存在型)の場面では、習得が困難であり、学習者の誤答は「た」「ある／いる」に分かれていた。一方、中国語で“着” と“有”の使用が見られた「状態変化動詞+ている」(存在型)の場面では、学習者の「ている」の使用率が高く、誤用は「ある／いる」に集中している。「た」の誤用はほとんど見られないことが示されている。さらに、中国語で“着”の使用が多かった「状態変化動詞+ている」(非存在型)の場面では、学習者に「ている」の高い正答率が見られている。「ある／いる」「た」の使用はないことが明らかになっている。以上のように、“了” “着” との共起可否という点に加えて、「存在型／非存在型」によって「結果の状態」の「ている」の使い分けの難易度および誤答の傾向が予測できることを示している。

学習者の母語である中国語と日本語との対照から習得難易度と誤答の傾向を予測し、その予測が妥当なものであることを示した本研究は、これまでの日本語のテンス・アスペクト習得研究を一步進めるものである。

[本論文の評価]

本論文は、以下の各点において審査員から高く評価された。

- 1) 従来同じ「結果の状態」とされてきた「ている」について、「壊れている」のように中国語で“了”で訳されるものは中国人日本語学習者にとって難度が高く、「(電気が) ついている」のように中国語で“着”で訳されるものは難度が低いことを示している。
- 2) 従来「ている」に先立って習得されると考えられてきた「る」「た」について、義務的文脈(特定の形式を使うべき文脈。例えば「これ以上前に進むと、線路に落ち()よ」は「る」を使う義務的文脈である)において必ずしも正しく選択できず、「る」の代わりに「ている」や「た」、「た」の代わりに「ている」や「ていた」を選択してしまうことを示している。
- 3) 「習熟度」「時点(現在・過去・未来)」「対応する中国語動詞のタイプ」を変数とする実験デザインを用いることにより、“了”のみと共起できる動詞タイプ(例「落ちる」、「壊れる」)は、「ている」の正答率が低く、習熟度が上がっても上昇は見られない一方で、“着”とも共起できる動詞タイプ(例「座る」、「開く」)は、下位群から高い正答率を示しており、習熟度の上昇とともに正答率も上がることを指摘している。

一方、審査員から以下のようなコメントもあった。

- 1) SRE 理論を使わなくても本研究の主張は成り立つと思われる。
- 2) 現在はもっと新しい統計を使っているので、今後は新しい統計手法に目を向けるべきである。
- 3) 本研究は記述統計のみで、有意差について述べられていない。

このように本論文には、不十分と思われる箇所も見られる。しかし、本研究で行った研究は先行

別紙 1 - 2

研究の指摘を十分に超えるものであり、日本語の習得研究において重要な位置を占めるものである。全体的に見た場合、本論文は論旨が整然としていて、完成度の高い優れた論文である。

以上の評価に基づき、審査委員全員一致して、本論文が博士学位論文として十分にその水準に達していると判断した。